1

韓国日報 1967年12月5日付

「地平線」

捨てられた原爆人生の物語はかわいそうである。日本広島市上空に原爆が炸裂した日，細道で遊び過ごしていた5才の少女林彩花嬢は去る29日，22年目に息を引き取った。17才のとき初発病を訴えて以来，10年間を病床で呻吟してきたという。原子病後遺症との正確な診断が下りたのはわずか2年前のことである。

その診断には処方がなかった。韓国の医学とこれは

まだどうにも出来ない実情にある。ただ死ぬ日だけを待つほか仕方がないらしい。林孃の死は終戦後264番目の原爆様性者だとは言えども、いまだに社会は原爆人生について無関心な状態にある。

韓国僑胞の中、林孃の如き原爆被害者は8千余名に上る。林孃の父親と兄、弟や妹たちもすでに原爆症状が徐々に表れつつあるという。この見の毒な原爆家族に救いの手はどこからも来てくれない。

被爆者援護協会という団体があるが、孤独でかわいそうな人間同志の訴えに終る集りに過ぎ

外務省

ない。この団体で集計したのをみると、現在全国には3百余名の被爆不具者が廃人と変らない死の生活を継続しているという。そのほか~~4,220~~1200余名も今後10年経たずして各種後遺症により生計に脅威を受ける~~及ぼす~~だろうと主張している。大部分の被爆者らは脳神経障碍、消化不良、貧血症で苦しめられているという。

被害者たちはいるが加害者は現われず誰も同情さえしない実情にある。

20世紀文明の野蛮なのか。

日本には~~日本でも~~、原爆被害者のための療養法があって無料診察など いろいろと国家的恩恵を与えている。

米国でも特別な関心をもってかれらを助けている。

原爆を受けるべき何らの理由がなかったわれわれ

韓国同胞だけが悲惨な遺棄を受けるということは

人道上や国際正義にかんがみ堪えられないことである。

韓国日報 1967年 12月5日付

地平線

外